

国登録有形文化財(建造物)候補「旧太田家住宅」の概要

(1) 名称

旧太田家住宅 主屋、土蔵、道具蔵、門及び塀 計4棟 ※いずれも内部非公開

(2) 所在地（住居表示）

姫路市網干区興浜6-7

(3) 概要

旧太田家住宅は市城南西部の網干区興浜にあり、当地を東西に走る旧浜街道（室街道下道、室津道南路、網干道）沿いに所在する。網干地区は古くから港町として発展したが、江戸期に姫路藩領が成立した後に龍野藩領となり、さらに村ごとに丸亀・龍野・幕府領にわかれるなど、領主の変遷は複雑な様相を示した。江戸期の興浜（おきはま、旧奥浜）村は、東の新在家村、北の余子浜（よこはま、旧横浜）村と共に網干3ヶ村と称された。興浜は、龍野藩領時代の領主であった京極家が、万治元年（1658）に丸亀へ移封された後も京極家の飛び地領地となり、当地には丸亀藩領の陣屋が築かれていた。姫路藩内の高砂町（高砂市）、飾万津町（市内飾磨区）、室津町（たつの市）を繋いだ浜街道の利便性も高く、近代以降も港町として発展した。現在は、播磨臨海工業地域の一角として、沿岸部の埋立て地を工場が占めているものの、戦災を免れた当地には歴史的町並みが多く残されている。

太田家は、醤油醸造販売や貝釦製造業を営んだ商家で、近世以前の系図は詳らかではないが、興浜の総代も務めた家系と伝わる。当地に居を構えた当家初代の市次郎と2代勝治が醤油業を営んだ。2代勝治は貝釦の製造も行っており、明治44年(1911)の明治天皇姫路行幸の際に天覧に供された貝釦一式が、今も残されている。3代陸郎は、市北部の夢前町（旧置塩村）出身の名倉次（自由民権運動家で衆議院議員も務めた）の六男として生まれ、養嗣子として太田家3代目を継いだ人物で、民俗学者の柳田國男に師事するなど、自身も民俗学者として活躍した。



主屋 外観正面(南面) 西半部分



主屋 外観正面(南面) 東半部分

①主屋：昭和3年（1928）建設／昭和40年代（1965～1974）、令和7年（2025）改修

揖保川の東岸に位置する、醤油醸造等を営んだ商家の主屋。敷地中央に南面して建つ木造2階建て一部平屋建て、棧瓦葺きで、正面に応接室を張出す。居室は1、2階とも中廊下を通し、仏間や座敷は上質な木材を用い、床框等に漆塗りを施すなど格調が高い。室毎に工夫が見られる上質な近代和風建築で、「造形の規範となっているもの」として評価された。

補足解説：2代勝治により大正頃から建て始めたと伝わり、旧浜街道を挟んで南西に建つ旧山本家住宅（姫路市都市景観重要建築物、和洋折衷の近代和風住宅）を参考としたとされる。重厚な外観に町家風の平面を持つ伝統的な東半と、開放的な外観に居室の独立性を図った平面を持つ近代的な西半を併合させ、さらに正面に洋風意匠の応接室を張出すという、近代和風住宅ならではの伝統と革新が共存した創意工夫が見られる。内部も近代の和風意匠で整えつつ、一部居室や階段室などに洋風意匠も取り入れている。網干地区の近代和風建築における、やや実験的な和洋折衷の様相を示す貴重な遺構。



主屋 内部1階 座敷



主屋 内部1階 応接室

②土蔵：明治13年（1880）建設

主屋北西に南面して建つ家財蔵。土蔵造り2階建て、切妻造り本瓦葺きで正面に庇を付す。外壁は漆喰塗りで、正面は腰を海鼠壁として掛子塗り戸を開き、側背面の腰は縦板張り。内部は各階とも1室で、小屋は登梁とする。戸口の漆喰細工絵様や庇の持送り彫刻、吹寄せ垂木等が風格ある歴史的景観を形成しており、「国土の歴史的景観に寄与しているもの」として評価された。

補足解説：初代市次郎による建設と見られる。切石積みの基礎の上に建ち、戸口は石階段を据えて枠を鳥居型に設える。掛子塗り戸は4段とし、裏面は木瓜型に縁取って砂壁塗り（もと青色彩色か）を施す。



土蔵 外観正面（南面）



土蔵 正面戸口の持送り彫刻と吹寄せ垂木

③道具蔵：明治13年(1880)建設／昭和53年(1978)、令和7年(2025)改修

主屋北方に南面して建つ。土蔵造り2階建て、切妻造り本瓦葺きで、外壁は漆喰塗りとして軒下に鉢巻を廻し、腰は正面を縦板張り、側背面はトタン張りとする。正面戸口廻りは木瓜型に塗廻す。内部は各階板敷きの一室で、1階壁は横板張り、2階は真壁を現す。本地区明治期の上層農家の屋敷構えを伝えており、「国土の歴史的景観に寄与しているもの」として評価された。

補足解説：初代市次郎による建設と見られる。切石積みの基礎上に建ち、正面には前面に渡る下屋を付していたが、老朽化による崩落にともない撤去した。内部には道具のほか味噌樽などが保管されていたが、階段登り口に残存する横引き板戸に亜鉛メッキ鋼板を張る他、二階床板の下面にも鋼板が張られていた痕跡があり、道具倉庫と味噌醸造・保管庫など、上下階を用途的に区画していたとみられる。また、小屋組は、妻側は和小屋組とするが、内部は棟を支える通し柱に梁を差し掛ける部分と、通し柱に牛梁を渡して登り梁を掛ける部分を組み合わせた、独特の架構をみせる。なお、下屋や2階床、階段の欠失などは将来的に復旧を検討する予定。



道具蔵 外観正面(南面)



道具蔵 内部2階 小屋組み

④門及び塀：昭和3年(1928)建設

旧浜街道沿いの敷地南辺を画す塀と門。塀は棧瓦葺きで背が高く、正面側は真壁漆喰塗りで腰を縦板張りとし、足下に銅板を張る。通りから控えて塀に門口を開き、腕木庇を掛ける。戸口は外側に引違い格子戸、内側に引分け板戸を建てる。長大な塀と門が街道沿いの景観を形成しており、「国土の歴史的景観に寄与しているもの」として評価された。

補足解説：2代勝治により、主屋と共に建設されたとみられる。門口右手(東側)に通用口を開いて引違い板戸を建て、表側に銅板葺きの庇を差し掛ける。背面側は真壁漆喰塗りで腰をモルタル洗出し仕上げとし、門口西側は柱間2間毎に石柱の控え柱を設け、東側は柱間3間の下屋を付して簡易な物置とする。



門及び塀 外観正面 南東より



門及び塀門 外観正面 門口